

下坂さんが「フリーズするような」と話す感覚を写真で再現した。デイサービスの利用者が体操で動く間、下坂さんに止まってもらった。自身が置いていかれるように感じるという(2020年11月30日、京都市右京区・高齢者福祉施設「西院」)



病に多くを奪われた。何が大切かも学べた

1面から続く

アルツハイマー病の下坂厚さん(47)は、日常生活で認知症のさまざまな症状に苦しめられている。デイサービスでケアワーカーとして働いているが、利用者のレクリエーションで、次の順番の人や点数がよく分からなくなる。周囲の人はスムーズに動いているのに、自身は止まっているように感じる。

「パソコンがフリーズするような感覚」夕食の直後に何を食ったか忘れる。今が朝なのか、夕方なのか分からないときもある。「将来のことをうまく組み立てて考えられない」。いつも心どこかに不安がある。一人になると考え込んでしまい、心に暗い雲が立ち込める。

2019年に認知症と診断され、絶望の感情を抱えた。「できなくなるのを仲間に見られたくない」と勤めていた魚屋を退職。ほとんど外出しなくなった。「自分の存在ってなんだろう」。社会とのつながりが切れ、居場所をなくしたと感じた。「人生を終えたい」との考えも頭をよぎった。

福祉職の支援が転機になった。世話になった認知症初期集中支援チームなどを通じて高齢者福祉施設「西院」(京都市右京区)を紹介され、デイサービスで働き始めた。

介護職は初めてで、仕事を覚えることができるか不安だった。利用者のお年寄りとのコミュニケーションも取れず、会話も続かなかった。しかし、入浴を介助したり、食事を口に運んだり、介護を通じて利用者と触れ合い、「人と人として打ち解けていった」。働き始めて1年半、今では息子のようにつながってくれる利用者もいる。

名前はまだ覚えていない。でも、いつも会っていることが分かる。「家族のような存在」と感じる。「人とつながる喜びを取り戻した」。死にたいとは思いはもうない。

認知症の利用者も多い。何を話しているのか分からないこともある。それでも自分からそっと手を重ねると、安らかな顔で優しく握り返してくれる。人にとって、社会にとって、何が大事なのかを教わった気がした。「社会では考えること、考えられることが大切にされる。でも、感じるものが一番大事だ」。認知症は下坂さんから多くのものを奪った。しかし、大切なものを学ぶ機会も与えてくれた。

下坂さんの手と重なり合ったしわだらけの手は、とても温かかった。

(松村和彦)

利用者が下坂さんを描いた絵
利用者の手をそっと包み込む下坂さんの手(3月8日)



コロナ禍で居場所を守る

下坂さんが働くデイサービスで1月、新型コロナウイルスのクラスター(感染者集団)が発生。利用者と職員計14人が感染した。

河本歩美所長は、二つのことの大切さを痛感した。感染が疑われたらただちにデイサービスを「停止」すること、コロナ禍でもデイサービスを「継続」すること。

デイサービスは高齢者が集団で過ごすため感染が拡大しやすい。しかし、「利用者はデイサービスに通うことで日常生活を継続できている。ここが居場所になっている」と河本所長。「認知症の方は非言語のコミュニケーションが大切。そばにいて、人と人としてつながることで落ち着く」と継続の意義を語る。